

母の 661 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

季節のともだち②／澤口たまみ 2
とっておきの一作②／広瀬恒子 3
沖縄・高江の自然に囲まれて
—新作絵本『やんばるの少年』に込めた思い／田島征彦 4
作者それぞれの『うまれてきてくれてありがとう』 6
「かみしばい・おはなし会」レポート 7

イラスト／長谷川義史



ちがうってことを胸の内へ

村中李衣

電車の中での出来事。向かい側の席で赤ちゃんが黄色い三角形の積み木と赤い筒状の積み木を右手と左手に持って、不思議そうに、かっちんこっちんぶつけあっている。そのうち、ふたつをピタンとくっつけようとしたリカいっぱいフリフリしたり。それからまた、真剣にふたつの積み木を見つめる。それはまるで、自分の手の内にある、いや、この世にある「ちがう」ってことをじいーっくり味わっているかのよう。やがて赤ちゃんは、口を大きく開け、形の違うふたつの積み木を同時にかぶり。おお、そりゃ無理だわ。あんたの口には入らんぞ！と思わず身を乗り出した私。でも赤ちゃんは、へっちゃら。よだれを浴び、てらてら光り始めたふたつを顔の前にもってきてにっこり。ああ、異なるふたつを結びあわせる儀式が終わった瞬間だな、と思った。

このところ、「異なり」を排除する動きやそれによって引き起こされる痛ましい事件が後を絶たない。震災後「絆」ということばが流行ったが、今はその絆以前に異なりを結びあわせる力がそぎ落とされている。「みんな違ってみんないい」が、教育現場で歓迎された時代、どこかでその「いい」は、当事者同士の感覚でなく外から眺めた「いい」で終わってはいなかったか？ これはまさしく自分への反省だ。

友人が園長をしていた幼稚園でのこと。歩行器を使って歩く少女が卒園を前にしたある夕暮れ時、滑り台を見上げて「こくん」した。（のぼってみたい、のぼるんだ）の「こくん」。園で過ごした時間、やりたいと思ったことには臆することなく向かっていった彼女の最後の挑戦。一段ずつ全身の重みを両腕で引き受け昇っていく彼女を見守りしっかり支えたのは園で一番やんちゃな男の子だった。ふたりが互いの違いを受け入れ支えあっていく姿にちいさい人のやさらかな「未来」の創り方を教えられた。自分とは違う誰かに出会うことは、自分と深く出会い直すこと。戸惑ったりドキドキしたりしながらひとつずつ開けていく子どもたちの「未来」への招待状になればと、石川えりこさんとふたりで、『こくん』（童心社）を創った。どんなにささやかでも、信じる絵本の世界から、異なりを排除しない世界をめざして、大人であるわたしも発信し続けていきたい。

（むらなか りえ／児童文学者・ノートルダム清心女子大学教授）

季節のともだち ②

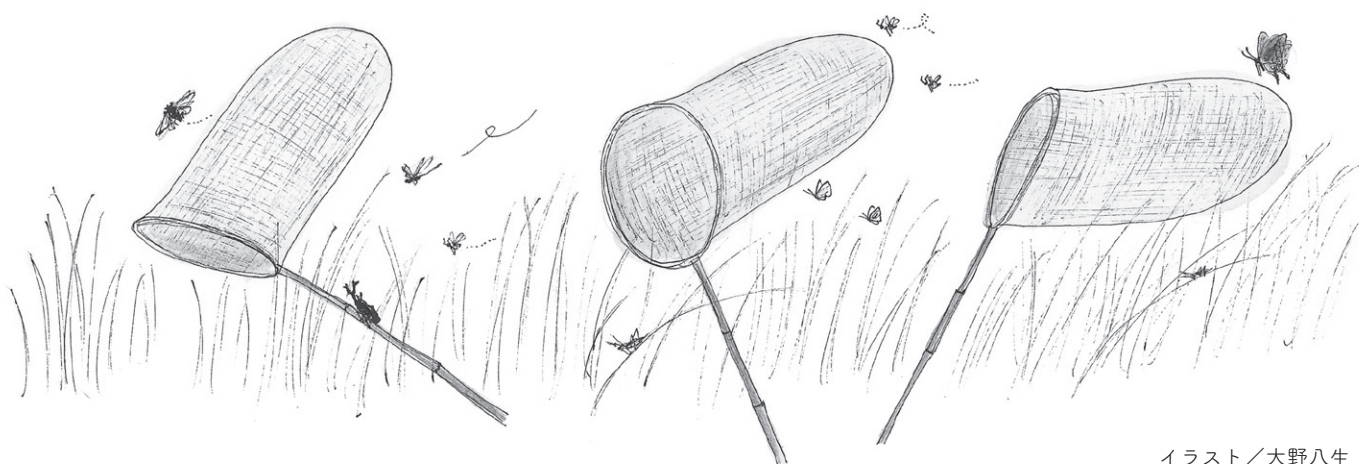
夏 昆虫

夏の虫に会いにゆこう

虫の好きな子どもたちが、わくわくする季節がやってきました。酷暑となる時間帯を避け、木かげや水辺のある公園などに、涼を求めながら虫探しに出かけてみましょう。じつは虫たちも、暑すぎるのは苦手なのです。

夏の水辺では、大型のトンボであるヤンマのなかまが見られます。流れのある小川ならオニヤンマ、流れのない池なら黒地に水色が鮮やかなオオルリボシヤンマや、緑色が美しいクロスジギンヤンマが飛んでいるでしょう。朝には、水草に上ってきたヤコから、ヤンマが羽化しているかも知れませんが、

近くに木が生えていたら、きっとセミの声が聞こえていますね。チーンとかん高い声で鳴いているのはニイニイゼミ、ジーンと低い声で鳴いているのはアブラゼミです。ミンミンゼミは名前のとおりの鳴き声で、ヒグラシは夕方、あたりがうす暗くなると、いっせいにカナカナカナ……と鳴き始めま



イラスト／大野八生

澤口たまみ

す。ツクツクホウシが鳴くのは、そろそろ夏休みも終わるころかな。

花が咲いていれば、チョウやミツバチ、ハナアブや小型のカミキリムシなど、いろいろな虫が訪れます。大きなアゲハがストローのような口をのばし、おいしそうに蜜を吸うすがたも見られるでしょう。

夜は、窓辺に飛んでくる虫を眺めるのも楽しみです。ガは、チョウと同じなかで、よく見るときれいです。気温の下がる夜に飛ぶため、毛深くもふもふしているので、ぬいぐるみのようにかわいいものもいます。もちろん運がよければ、カブトムシやクワガタが飛んでくることもあるでしょう。

こんなふうに虫は、すみかや動きまわる時間帯が、種類によってまちまちです。いろんなところで、虫を見つけてください。

さわぐち たまみ／岩手県盛岡市生まれ。絵本作家・エッセイスト。絵本に『だんごむしのおうち』『わたしのここ』『いもむしってね…』（福音館書店）、著書に『虫のつぶやき聞こえたよ』（白水社）『新版 宮澤賢治 愛のうた』（夕書房）などがある。

とっておきの一作 ②

だれかさんと あそぶのって なんて おもしろいんだろう

広瀬恒子

ひろせ つねこ／一九三二年東京都生まれ。「子どもと本」に関わる活動を長年続けている。親子読書地域文庫連絡会代表を務めるほか、日本子ども本研究会、小金井子ども文庫連絡会の活動に携わり、現在に至る。



こぎつねコンとこだぬきポン
松野正子／文 二俣英五郎／画 一九七七年刊行

この絵本を手にとると、まず目に飛び込んでくるのが、ちょっと照れくさそうな目をしたたぬきと、恥ずかしげなきつねが、お互いの手をむすんでいる表紙です。ふたりは赤い樫の花にとりかこまれていて、これからどんな物語が始まるのだろうか、期待がふくらみますね。

おはなしの主人公は、きつねのコンとたぬきのポン。コンは杉の木山に、ポンは樫山にすみ、それぞれ「どっかにともだちいないかな?」と遊び相手を求めあっていました。

そんなふたりは、山のがけつぶちで出会い、歌をうたいあいます。ところが、親たちは、自分たちのご先祖さまがつめたい仕打ちにあったことから、お互いにうらみがあり、ふたりが友だちになることを許しません。そして、子どもたちに、自分の身を守るための化け方を教えます。コンもポンもきびしい練習に明け暮れることになり、お互いのことを考えるひまもなくなってしまいました。そんなある日、嵐がやってきて、倒れた木が、杉の木山と樫山をつなぎます。ポンはその木を渡っていき「きみ、ぼくのともだちになる?」とたずね、コンも「ええ、もちろん」と、ふたりはよろこびを分かちあいます。

この絵本の特徴として、友だちがいたらどんなに楽しいだろうという切実な願いを、子どもたち自身の言葉で表していることがあげられます。一般的には「友だちは大切だから」と、大人が子どもに期待する場合が多いように思いますが、

すが、このお話では、はじめ親たちは子どもの友だちを快く思っていない。当の子もたち自身が友だちを熱く求めあい、「だれかさんとあそぶのって、なんておもしろいだろう」と気がつくのです。

作品が発表された七〇年代後半の日本の子どもたちの状況は、受験体制が進みだし、子どもたちから自由な遊びの時間がうばわれて、そのひずみが問題となってきた時期でもあります。「ゆとり教育」を切実に求める声も出始めていました。ですから、コンとポンの「友だちと遊びたい」というごく当たり前の願いが、当たり前ではない状況であったと言えます。

コンとポンは、友だちとあそぶことがどんなにうれしいかをこの絵本で語ってくれました。ふたりが化けつこをする場面があります。コンはポンに、ポンはコンに化けて、ふたりは入れ替わって相手の家に帰っていきます。ちょっとしたいたずら心もあるこの行動は、「遊び」の真骨頂を見せつつ、私たちをも楽しませてくれますね。その行動の結果、両家の親たちも、それぞれの友だちを「わるいやつとはおもえんな」と認めあい、橋を渡って行き来し、家族ぐるみの仲良しになります。子どもの素直で勇気ある行動が、親の考えをも変えてしまうのです。本作が一九七七年に刊行されて以来、版を重ね、ロングセラーとして読み継がれてきたのは、子どもの側からの溢れんばかりの思いが詰まっているからではないでしょうか。

田島征彦

沖縄・高江の 自然に囲まれて 新作絵本 『やんばるの少年』に 込めた思い

たじま ゆきひろ／一九四〇年大阪府堺市生まれ。
京都市立美術大学工芸科染色図案科卒業。一九七六
年『祇園祭』（童心社）で第六回世界絵本原画展金
牌受賞。一九七九年『じくくのそうべえ』（童心
社）で第一回絵本にっぽん賞受賞。二〇一五年
『ふしぎなともだち』（くもん出版）で第二十回日本
絵本賞大賞受賞。主な作品に『とんとんみーときじ
むな』『てっぽうをもったキジムナー』『そうべえ
ときじむな』（ともに童心社）など多数ある。



取材を通して高江で知り合ったご家族



やんばるの少年
たじまゆきひろ／作
本体価格 1600円＋税

*1 高江ヘリパッド問題：1996年の日米特別行動委員会最終報告で、沖縄県国頭村と東村にまたがる国内最大の米軍北部訓練場の過半を返還することが盛り込まれた。それに伴い6カ所のヘリパッドを東村の高江地区周辺に新設することになり、国が2007年に着工するも、反対運動は今日まで続いている。ヘリパッド建設計画について、稀少な自然と環境破壊の観点から、日本自然保護協会、日本野鳥の会などの団体や、沖縄生物学会、日本生態学会、日本鳥学会、昆虫学会など、多くの学会が建設予定地の見直しの要望を提出している。

*2 田島征彦さんの双子の弟で、絵本作家の田島征三さんのこと。ともに高知県の山村で幼少期を過ごす。

五月二十日に『やんばるの少年』が刊行されました。沖縄に取材に通われて作り上げた本作について、作者の田島征彦さんにお話を伺いました。

——『そうべえときじむな』『とんとんみーときじむな』『てっぽうをもったキジムナー』など、沖縄を舞台にした作品を多く描かれていますね。

いちばん最初に沖縄の絵本をつくったのは、『とんとんみーとキジムナー』で、主な舞台は八重山群島の西表（いりおもて）でした。西表の自然の中に入って、何度も何度もスケッチをしました。形のあるものや人体は、スケッチしていくと描写力の勉強になるのだけれど、亜熱帯の植物たちのバリエーションというかものすごい力強さは、何度も何度もスケッチしてみてもなかなかそれがつかめないのね。必死になってスケッチしていると、鳥とか虫、蝶なんか寄ってきて、体に止まったりして、それは僕にとって、沖縄の自然と完全にけあった初めての体験でした。そういった体験からくる絵が『とんとんみーとキジムナー』の中にたくさん入っています。

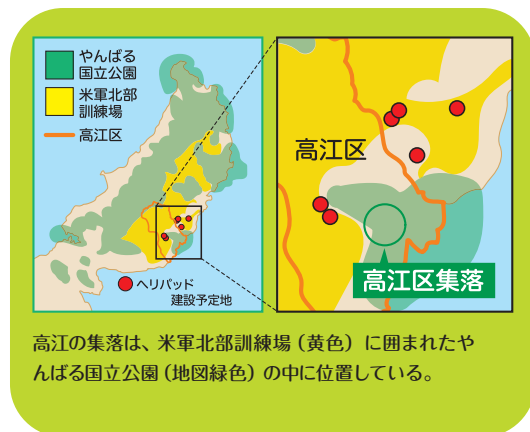
今回の『やんばるの少年』では、沖縄の美しい自然を描くという点では同じですが、『とんとんみーときじむな』と

はちがった意味をこめなきゃいけないので、スケッチよりも、森の中で撮った写真を参考に描いていきました。形ではなくて、自然が持つる力を抽象的に表現した絵本になったと思っています。

——『やんばるの少年』はどのようなきっかけで制作がはじまったのでしょうか？

辺野古に基地が作られると聞いて、二〇一六年に取材に出かけたことがきっかけです。そのときに、米軍の北部訓練場の返還のこと、返還の条件に、東村高江にヘリパッドを六つもつくるという話を聞いて、高江に取材の足を伸ばしました（*1）。ヘリパッド建設については、例えば、住民にどのような影響が出るのかといった、詳しい情報があまり知らされていないことがわかってきました。また、取材する中で、沖縄島北部一帯にある「やんばるの森」の環境破壊についても知りました。

子ども達をつれて、「やんばるの森」で昆虫や植物の見学会を行っている宮城秋乃さんという昆虫研究者がいます。宮城さんは、高江や辺野古の貴重な生き物が開発によって殺されていることを強く訴えている人ですが、彼女の講演会で、『いのちの森 高江』（謝名元慶福監督）というドキュメンタリー映画を知りました。これは、高江の自然や地元住民の気



持ちに重点を置いて制作されたドキュメンタリーで、開発の現状を広めるため、購入者にも上映会を開いてほしいという意図で上映権付きのDVDとして売っています。僕はこれを買って、京都や大阪の講演会で上映しました。ただ、上映を観た人だけではなくて、もっと多くの人たちに、開発で理不尽に貴重な生物がどんどん殺されているという問題を、伝えられないものかと考えるようになりました。

そして、もっともっと低年齢の子どもたちにもわかるような絵本を作ろう、と思うって、高江に通い始めました。その中で、高江に住むある家族と知り合い、その子どもたちと一緒にやんばるの森に入るができるようになりました。その家族の取材をしながら、時間がたっていくうちに、発想が少しずつわいてきて、

この絵本の形になっていきました。

子どもたちと一緒にく川なんかを歩き回っていました。あとは子どもたちに話を聞いて想像したり、お母さんに話を聞いた、実際に森の中を歩いたりしながら作品のイメージをふくらませていきました。この絵本は、現実から離れた発想ではないので、地に足のついた絵本としてまとまったと思っています。

—— 作品の中で、自然の描写が印象的です。それと対比される形でオスプレイの脅威も……。

沖縄について、あまりにも知られていないと感じているので、沖縄の子どもたちだけでなく、ヤマト、日本の子どもたちに知ってほしいと思っています。

どうして沖縄のことがあまり知られていないのかと考えると、沖縄があまりにも日本から切り離されたままになっていて、その根底には、無関心や差別があるように思ふのです。こうした問題に立ち向かっていくには、やっぱり、子どもたちの生活を通して、ちょっとやさしい気持ちになれるような、そんな絵本が必要じゃないかと思っています。

子どもたちと川に入っていくって、ウナギをつかまえたりにしてね、それは僕と征三（*2）が七十五年前に高知の山奥で

やっていたことと、同じなんです。それを七十五年前じゃなくて、今現在やっている子どもたちがいる。

自然の中に入っていくことは、子どもにとっても、大人にとってもすごく楽しいことなんです。それが今回の絵本のテーマになっていることで、いわゆる軍事基地とが、反戦的なものとは違う所から沖縄を知ってもらうことになるんじゃないかと思っています。

オスプレイやヘリパッドの建設は、確かに今、高江で問題になっていることだけれど、大きな問題は、人間の身勝手であんなに美しく大きな自然を簡単に破壊していること。そしてその問題にみんなが目を向けていないことだと思っています。

あんなに美しい森をかき乱して、大きな木を切りまくってなにも感じない無関心さ。自然を破壊していくそういつた大きな力に、子ども達や生き物たちの命が、どう抵抗したらいいのかわからないまま自然から追い出されていく。オスプレイは単にそうした力の象徴として出ているだけで、言いたいことは、自然の中の生き物、動植物の命のを感じてほしいということなんです。

—— どうもありがとうございました。

（聞き手：編集部）



しもとよう

三十万部ときいてもなんだか信じられない気持ちです。私自身、自分のことを絵本作家ではなく、家庭が好きな普通のパパだと思っていて……。何かを作るときは、家族に喜んでもらいたいということ。この作品も、はじまりは息子への純粋なプレゼントでした。それが今、多くの読者に共感してもらえていることは、大きな喜びです。この本を真ん中に、たくさんのお子さんが心を通わせることができているのなら——そう考えると幸せな気持ちになります。いつか息子の子ども、つまり私の孫にもこの絵本を手渡すことができたら、と想像しています。

息子がうまれてからのことを思い返すと、おむつを替えたり、離乳食を作ったり、もちろん遊んだり、いろいろなことをさせてもらいましたが、大変だった記憶がまったくないのです。どんな場面も楽しい思い出になっているのですよね。日々成長し変わっていく息子を一番近くで見られる幸せも感じてきました。

これから妊娠、出産、そして子育てを頑張るお父さんお母さんには、大変なこともあると思いますが、はじまる前からあれこれ考えすぎて身構えることなく、自然体で楽しんでほしいと思います。



作者それぞれの 『うまれてきてくれてありがとう』

2011年の刊行以来、多くの読者から共感の声が届く絵本『うまれてきてくれてありがとう』。このたび、累計30万部を突破しました。作者のお2人に、作品への思いをうかがいました。

『うまれてきてくれてありがとう』

しもとよう／ぶん 黒井 健／え 本体1,300円＋税

黒井 健 くろいけん

この作品はあまりラフを作りこみませんでした。特に後半部分は、実際に絵を描きながら、何度も試行錯誤していきました。そんな時間がとても楽しかった。絵と会話していく感覚がありました。私自身、描いていくうちに主人公のあかちゃんと同じような気持ちになつていったのかもしれない。そうしてようやくたどり着いたお母さんのおなかの中。「ほく、ママのこどもでうまれるよ」の場面は、幸せな時間だと思って描きました。

もう三十万部なんて、とても驚きました。読者の方からいただくメッセージはすべて読ませていただいています。が、こんなにもいろいろな「うまれてきてくれてありがとう」があるんだなあという感じがします。妊娠、出産が必ずしも順調ではなかった方がこの作品に深く共感してくださっていることは、とても意外でした。ありがたいことです。私自身、子育てのときには父であることに必死で、あまり感じていなかったのですが、孫が生まれ、命の誕生の神秘や子どもが成長していくことの輝きを間近で感じるようになりました。人間が育っていくうえで、たっぷりとかわいがられることが、どんなに大切かとおもいます。生きていくうえでずっと変わらない大切なことが、この作品には込められているのかもしれない。



「わたしの“うまれてきてくれてありがとう”」を教えてください。
「#絵本うまれてきてくれてありがとう」をつけてTwitter、Instagramよりご投稿ください。
童心社公式SNSにて随時ご紹介いたします。詳しくは左記QRコードよりご覧ください。

<https://www.doshinsha.co.jp/special/umaretekitekuretearigatou/>

「かみしばい・おはなし会」レポート

童心社は、現在の東京都文京区千石に社屋を移転して、今年で十四年目を迎えます。創業六十周年を迎えた二〇一七年より、地元地域に根差した活動を継続しようと、隔月末の土曜日に、社屋の四階にあるKAMISHIBAI HALLを開放し、「かみしばい・おはなし会」を開催しています。四月二十七日(土)に行われた「かみしばい・おはなし会」に参加してきました。

大型連休の初日。あいにくの空模様にもかかわらず、開始時刻の少し前より、続々と近隣の子どもたちが集まってきました。総勢四十名ほどの親子が集まり「かみしばい・おはなし会」が始まりました。

最初の作品は『おおきくおおきくおおきくあれ』（まついのりこ／脚本・絵）。

子どもたちは舞台に入れられた紙芝居を、食い入るように見つめています。みんなと一緒に声を合わせる場面では「おおきくなあれ!」と元気いっっぱいな声がホールに響き渡りました。

他にも、『おはよう! おはよう!』（とよたかずひこ／脚本・絵）、『おとうふさんとそらめきん』（松谷みよ子／脚本 長野ヒデ子／絵）などあかちゃん



参加者の声

参加した親子の方々にお話を伺いました!

男の子(4歳)のお母さん

童心社さんの入り口に貼ってあるチラシを見て、はじめて参加しました。近所でこのようなイベントがあって、嬉しく思っています。

3回目の参加の女の子(6歳)

おうちにもこいのぼりがあるよ。こいのぼりのかみしばいがたのしかったです。

女の子(1歳2ヶ月)のお父さん

年齢の近いお友だちが集まるこういう場所に、娘が慣れてくれると良いなと思って参加しました。また来たいと思います!



お2人のご友人と一緒に参加した女性

グループで読み聞かせの活動をしています。自分たちのおはなし会の参考にもなればと思って覗きにきました。紙芝居は、みんなで一緒に楽しめる一体感が良いですね。



から楽しめる紙芝居や、『まじのいのぼり』（石井聖岳／脚本・絵）、『めだかのめめちゃん』（高家博成／脚本 仲川道子／絵）、『こわがりつばめのピッピ』（こいずみゆうこ／脚本 福田岩緒／絵）など季節にぴったりの紙芝居が演じられました。

当日は童心社の田中社長も参加し、紙芝居を演じました。

「小さな子どもを持つ家庭は、休日の行き場所を求めている」という声も伺います。親子同士の出会い、地域でのつながりができる場になればと思い、この取組を始めました。絵本や紙芝居を出版する童心社が、日ごろ顔の見える地域の中で、少しでも親子の役に立てていれば、これほど嬉しいことはないですね」

次回の「かみしばい・おはなし会」は六月二十二日(土)に開催します。

どうぞ皆さまお誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。

(編集部)

紙芝居と絵本の出版社・童心社よりお知らせ

かみしばい みんなあつまれ!

かみしばい・おはなし会
場所 童心社4階 KAMISHIBAI HALL
お問い合わせ 03-5976-4181

6/22(土)
15:00~(予約不要)
参加自由 (無料)
0歳からのかみしばいもあります

6月の新刊図書！

ちいさないきものずかん

みつけた！ 水べのいきもの みつけた！ りくのいきもの

谷本雄治／文

石森愛彦／絵

本体価格 1400円＋税



身近な自然の中で出会える生き物を紹介した入門絵本図鑑。びっくりするような生態を、コミカルなイラストで掲載。じっくり見て、遊んで、生き物と友達になろう。身のまわりの小さな自然に目を向け、子どもと一緒にめいっぱい楽しむ術を伝授します。

あいさつしかけえほん

おはよう

新井洋行／さく

本体価格 1200円＋税



「くまさん、くまさん、あさですよ！」おきがえしたら……。『おはよう』『こんにちは』『こんばんは』1日のあいさつを楽しくおぼえよう！ 上下にわかれたページをめくるしかけ絵本！

童心社のおはなしえほん

こくん

村中李衣／作

石川えりこ／絵

本体価格 1300円＋税



わたしは退院して、大好きなつばき園にきた。ある日、しゅんくんの挑戦を見て、わたしもすべり台にのぼりたいと思った。歩行器から手をはなし、ガッツンゴツンとひざをぶつけながら階段をあがっていった先には……。

だいすき絵童話

タコのターくん うみをでる

内田麟太郎／作

井上コトリ／絵

本体価格 1000円＋税



タコのターくんはうみをでて、そうげんまで出かけることになりました。ライオンのラオくんから手紙がとどいたのです。うみから出るときはすいとうをもっていきます。つかれたらあたまをぬらせばいいのです。

イラスト／長谷川義史



2019年6月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第661号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4187
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●僕の姉はトルコ旅行中、タクシーの運転手さんに「うちに泊まりにおいでよ」と言われたら本当に泊まりに行ってしまう人です。僕は全く違い、著者の先生に「遊びにおいでよ」と言ってもらっても、本当に行ったら迷惑がられるかなと思ってしまう質です。「誰かに会おうことは、自分と深く会いたいこと」——人との関係から生まれるものを大切にすべきですね。 ㊦

●デンマークの学校給食でミートボールの提供を義務付ける立法が、いくつかの自治体で行われていると聞きました。背後にはムスリム排除の流れがあるそうです。多様な価値観や生き方が許され、同時にその〈異なり〉をつなげ、共感する社会を作るには、まず目の前の他者と向き合い、その姿に自らを映し、つながりを回復することから始まると信じています。 ㊦